

第二部門 〈子どもの育成に関する論文・実践記録またはエッセイ〉 入選論文

「通じないから、通じた」

―子どもと心を通わせるということ

瀬 口 優 子

# 瀬 口 優 子 さん

## 〔略歴〕

年 齢 39歳  
住 所 三重県在住  
略 歴 東京都出身 東京大学工学部卒業、同大学大学院修士課程修了。化学メーカーで研究開発職として勤務後、育児に専念。その後、非常勤として複数業種を経験。現在は、大学病院で臨床研究の事務補佐に従事。

## 〔応募動機及びコメント〕

暁烏敏賞との出会いは、私にとってまさに奇跡的でした。大学では化学を学び、職歴も技術系が中心でしたが、学生時代から哲学や心理、教育分野に興味を持っておりました。家庭を築き、子どもたちと向き合う中で、教育・心理的な問題や自身の内面的な課題について考察・整理する機会が増え、それらを表現したいという思いが募りました。私のような立場でも表現できる場を探していたとき、暁烏敏賞を知りました。歎異抄講話を拝読し、暁烏敏の思いに触れ、感銘を受けるとともに「私も書きたい」という気持ちが湧き上がり、応募を決意いたしました。

このたびは、貴重な学びと表現の機会をいただき、誠にありがとうございます。大変光栄なご評価を賜り、深く感謝申し上げます。今後も子どもたちと向き合いながら学び続けたいと思います。そして、この素晴らしい出会いを大切に、暁烏敏の教えについてより深く知ってまいりたいと思っております。

## 〔梗概〕

本稿では、子育てにおける二人の息子との関わりを題材に、非言語コミュニケーションの会得や親子関係の変化、親側の自己理解の深化について、エッセイに近い形で論じた。

人と心を通わせることの難しさに悩んできた私は、子どもたちとの関わりの中から、言葉ではなく表情や視線、空気で「心を通わせる」ことを学んだ。そのプロセスは苦しく且つ鮮烈な体験であった。この経験を情緒的に描写しつつ、その背景にある心理的過程や価値観の変化を分析・考察した。読者が自身の暮らしや人との関わり、過去の経験と照らし合わせながら、他者や自己との向き合い方を考えるための一材料となれば幸いである。また、子育てや人間関係で同じような悩みを抱える読者があつたとしたら、本稿が何らかの示唆やヒントになればと願う。

本稿は九章に分けた。

前半の四章で、私と子どもたちの間に起きた出来事や心の動きを体験記録として記した。第一章では導入として私が抱えていた悩みの大枠に触れ、第二章で長男（八歳、小学三年生）との間に感じていた空気のズレや、言葉にしても伝わらないもどかしさを表現した。繊細な長男との関係が自分の内面的な課題を浮き彫りにしたことについても触れた。第三章では次男（一歳）との関わりのなかで訪れた転機を描き、それに伴い長男との関係にも変化が生じたことを第四章で記した。

第五章以降では、私たちに起きた変化、特に『まなざし』で心を通わせるということを私が学んだプロセスについて、改めて考察を深めた。第五章では次男が私を変えた過程を分析的に振り返り、第六章ではタイトルにも表した「通じないから、通じた」という逆説的な教訓について詳しく論じた。第七章では親としての私が経験した内面的な変化について詳しく述べ、同時に獲得した「宝物」感覚について触れた。第八章で

結び、第九章で謝辞を述べた。

## 一 導入…「なぜ、こんなにも通じない」

実は、子どもができる前から、私の迷いは始まっていた。他者と言葉で通じ合おうとしても思うように通じない。良質なコミュニケーションとはいったいどういうものなのか。心が通い合うとはどういうことなのか。そんな未解決の問いを抱えたまま結婚し、子どもができた。「夫となら」「子どもとなら」通じ合える、「家族なのだから」。そんな期待を抱いていた。でも、そうはいかなかった。

「なぜこんなに通じない？」

もしかしたら、結婚前よりもさらに、その迷いが深まってしまったと言えるかもしれない。通じない日々は、長く続いた。長男が八歳にまで成長し、次男が一歳を迎えるまで。

## 二 通じない日々―長男とのズレ、言葉と正しさへの執着

「ごはんできたからおいで」

私が呼びかけると、長男は黙ってやってきた。八歳、小学校三年生。賢くて繊細で、難しい時期に入っていた。ちょうど次男が生まれて一年経つか経たないかの時期でもあり、私は、まだよちよち歩きで手がかかる次男にかかりきりで、長男と関わる時間をうまく取れずにいた。そのためもあってか、私たちの間には、溝と呼ぶほどではないものの、空気のズレのようなものが生じていた。

返事もなく黙って食卓に着いた長男に対し、私は叱る気になれなかった。彼がむっとしたような、感情を押し殺したような空気をまとっているのを感じ取ったからだ。怒っているのか、疲れているのか、それとも別の何かがあるのか。表情では読み取れなかった。けれど、全身からにじみ出る「なにか」を感じ取れた。そしてそれが、長男に対する自分の接し方の「ズレ」が引き起こした結果だという実感があつた。そのため、彼に何かの言葉を言い聞かせて「正す」ということができなかったのだ。

食卓に並んだ料理を前にしても、長男の箸の動きは淡々としている。私が話しかけても、反応は薄い。その静けさの奥にある、感情を隠そうとする強さとやさしさ。私を責めたり、反抗したりはしない。ただ、無言のまま従っている。そこにあるのは、安心でも納得でもなく、我慢のようなものに見えた。そしてその我慢の奥で、長男が「縮こまっている」ような、そんな気がした。

宿題や就寝時間、食事のルール、テレビやゲームの時間制限――毎日の小さな場面で、そのズレは積み重なっていった。私が発した「こうあるべき」「これが正しい」という言葉に、長男は無表情で黙って従うことが多かった。それを「小学生らしい反抗期」と決めてやり過ごす気にはなれなかった。彼の目の奥に見え隠れする不安や戸惑いに気付きながら、私はどう接したらよいのか分からずにいた。

頭ごなしに言うことは、できるだけ避けてきたつもりだった。言葉で説明し、理屈を重ねて理解を求めれば、実るはずだと期待していた。でも、その通りにはいかなかった。彼が私の言葉を受け取らなかったというのではない。私自身が、言葉が大事だと言いながら、実際は言葉はどう紡いだらいいのかわかっていなかったからである。何をどう伝えたらいいかわからずやきもきとして、思いついた「文句」をひたすら並べ、最終的にはピシャリと言いつけてしまう、そんな日々の連続だった。宿題の時間になれば、

「早くやりなさい」

「もっと集中してやりなさい」

そして就寝の時間になれば、

「早く寝なさい」

それが逆効果なのは知っていたつもりだった。でもそれしかできなかった。案の定、長男はさらに内に閉じこもり、生活は思い通りにいかないままだった。

「この空気は、私の理想とはかけ離れている。食卓も勉強も寝る時間も、本来は親子にとって安寧の場であるべきではないか。なぜそうなの？ どうして、こんなにも伝わらない」

煮え切らない気持ちを抱えたまま、ただ日々が過ぎていくのだった。しかし実は、最初から気付いていた。

「私のやり方が違うのだ」

はつきりと、ひしひしと、感じていた。

「もつと違うやり方で子どもと接したい」

繊細な長男を押さえつけたくなかった。長男も私自身も安心して過ごせる場をつくりたかった。でも、一体どうすればいいのか、わからなかった。自分が正しいと思うことを伝え、従わせる方法しか、私は知らなかった。だが実はその理由にも、薄々気付いていた。それは伝え方以前の問題であった。記憶にある幼少期の自分の姿と目の前の長男の姿を重ね合わせる中で、じわじわと味わっていた。自分自身が「正しさ」の枠に押し込められてきたという記憶である。

「いいから食べなさい」

「いいから勉強しなさい」

「いいから寝なさい」

誰かの期待に応えようと、言葉にならない不満や悲しみを抑え込みながら、「いい子」であろうとした日々。私はそこに、長男と自分との重なりを見ていた。そしてその痛みが、自分の今現在にも影響しているのだと気付いていた。私は大人になり親になった今でも、「自分を殺して正しさの枠に収まる」ことしか知らなかったのだ。だからこそ、「伝えたいもの」を自分の中に育てることができていなかった。言葉の問題ではなく、何を言葉にするかという問題であった。この根本的で苦しい、だが向き合う価値のある問題を、長男が日々突きつけてくれていたのであった。そしてそれこそが、私と長男の違いであり希望でもあった。長

男は、枠の中にとじこめられることへの違和感や葛藤を、彼自身の身体ですっかり表現してくれていたのだ。

でもだからといって、だからこそ、何をしたらいいのか、私にはまだわからなかった。

「正解はなんなの？」

そう自分に問い続けながら、とにかく生活を回そうとすることしかできなかった。

長男が生まれたときから少しずつ積み重なっていたズレが、次男の世話が始まるとともに、こうして浮き彫りになってきたのであった。そして、そのもどかしい日々に光を差してくれたのも、次男だった。

### 三 転機…次男との関わり―言葉より先にあったもの

次男が生まれたのは、長男が生まれてから七年ぶりのことだった。彼の誕生は、我が家の空気を一変させた。ひさしぶりの乳児。快不快の感情をあらわにすることで大人の手を動かし、要求を満たそうとする次男。当然、こちらの思い通りにはならない。授乳も遊びも生活リズムも。それは、乳児なら当然のこと。長男のときに経験済みであった。だが私は改めて、予想がつかない日々にしたじろいだった。

それでも今回は、それを少しずつ受け止め向き合う余裕があった。ただ「通り過ぎるのを待つ」といった過ごし方はしなくなっていた。それは、私自身が二回目の育児だったためということもあるが、七年前に比べて育児支援の制度が整っていたこと、今回は夫と長男がそばにいて支えてくれたこと、そして次男自身がおおらかなタイプであったことも大きく影響したと思う。おかげで私は徐々に「目の前の次男をよく見ること」の大切さに気付き、それが長男との壁を超えるきっかけにもなったのである。

大きな転機となったのは、次男が一歳を迎え、保育園に通い始めた頃

の発熱看病であった。一歳になってすぐ保育園に入園させた次男は、入園してまもなく何回も発熱に見舞われることになった。かわいそうなことであったが、実はこの「発熱フィーバー」は、保育園児であれば多くの子が経験する通過儀礼のようなものであった。この関門を乗り切るところで子どもの体は強くなっていくのだと、そう自分に言い聞かせながら看病に当たる、それが保育園ママの宿命とも言えるかもしれない。ところがこの看病が、私にとってはなかなかの試練であった。子どもが病気の間は頼る先が限られるため、「ワンオペ」になることが多かった。特に解熱後、熱が下がりホッとしたのも束の間、次男は身体が本調子ではないためにひどく機嫌が悪くなるのがお決まりで、そんな次男と一日家で向き合い続けるのは大変なことであった。

ぎんぎんさんと泣きわめきながら私にすがりつく次男。病み上がりの不快感を全力で訴えてくるわが子を前に、抱っこする力は尽き果て、あやす気力もなくなり、途方に暮れて座り込む私。そんな中、ふと気付いた。「いま私は、この子から目を背けている」

はつとした。泣きわめくわが子の目を、表情を、私はちゃんと見たことがなかった。というのは、見ていられなかったのだ。感情を爆発させるその表情を面と向かって見てしまうと、かわいそうでたまらない気持ちになって、なんとかしてあげたくてもできない自分がとても嫌で仕方がなくなるのだ。いや、そういった同情や憐憫の心情は実は仮面にすぎなくて、本当のところは、痛々しい我が子の姿に過去の自分を重ね、同調し、不安と恐怖に飲み込まれる苦しみから逃れるために必死で目を背けていた、そういう生々しい事情だった気がする。記憶の中にすむ過去の自分、泣き叫び声を張り上げる瞬間の胸の苦しさを思い起こして、怖くてたまらない気持ちになっていた。きっとそれが、子どもたちの表情をまっすぐ見ることができなかった本当の理由だったのだと思う。

でも今回はふと思い立ち、勇気を出して、次男の目を見ることを選ん

だ。

「この子はいま、どんな顔をしているのだろう」

見てみれば、目はぎゅっと閉じられ、眉間には深いシワ、顔全体がくしゃくしゃで、その凹凸はまるで梅干しのよう、そして岩を思い起こさせるような硬さを帯びた表情がそこにあった。やっぱ怖かった。「あの頃」の記憶が蘇った。ただ苦しみを味わい尽くしながら時が過ぎるのを待つしかなかった、弱くて未熟な自分の記憶。そしてそれを未だに引きずっていた自分自身の「影」とも呼べそうな何か。それらが私を苦しめようとした。それでも、今回は思い直した。

「目の前にいる次男は、あの私とは違うではないか。いま苦しんでいるのは私ではなく、次男ではないか」

ぎゅっと閉じた目を見つめ続けた。くしゃくしゃの顔を、見つめ続けた。「熱い熱いだね」

と声をかけながら、そばに居続けた。ただそばにいて静かに見守ることを選んだ。それしかできない、でもそれを選んだ。

すると不思議なことに、次男は少しずつ落ち着きを取り戻し、やがて静かに私から離れ、澄ました表情でひとり遊びを始めた。しばらくするとまた泣きながら私にすがりついたが、そのまま見守っていると再び落ち着きを取り戻す、そんなことを繰り返しながら、最終的には穏やかに眠りに就いていった。この瞬間、私は感じた、

「通じた」

と。

これは、私にとって鮮烈な体験だった。子どもを「なんとかする」のでなく「見る」ということの効果に気付いたのだ。これまで空っぽなところから無理やり言葉をひねり出し、説明にならない説明、理屈にならない理屈で正しさを取り繕って相手を動かそうとしていた私が、「言葉よりも先にあるもの」を知った。それは、表情であり、視線であり、空



気であり、すなわち『まなざし』であった。見守り、待ち、沈黙する時間の中にこそ、心の動きや伝わるものがあると知った。『言葉のない世界』が先なのだ。次男がくれた「見る力」は、私の育児の軸を大きく揺らした。そして、その揺らぎの中で、長男との関係にも、新しい光が差し始めていた。

#### 四 変化…言葉にもまなざしを

次男の発熱看病を通して「見る」ことの大切さに気付いてから、私の中で何かが静かに変わり始めた。それまで私は、子どもとのコミュニケーションにおいて「言葉」に捉われすぎていた。正しい説明、的確な指示、筋道の通った説得。そうすれば相手はわかってくれるはずだと思いつ込んでいた。けれど、次男のくしゃくしゃの泣き顔をただ見つめて過ごしたあの時間は、「言葉を使わない関わり」の奥深さを教えてくれた。それは、長男との関係にも少しずつ影響を与え始めていた。一歳で手のかかる次男にまだまだ構いきりで、長男とのコミュニケーションの時間がなかなか取れない状況は変わらなかった。それでも、ふとしたときに、長男の目や表情を見るようになった。

それが直接のきっかけだったのかどうかは、今もわからない。でも、あの頃から少しずつ、長男との間に流れる空気が変わっていったのを、私は確かに感じていた。ちようどその頃、具体的な変化をはっきりと感じる出来事があった。それは小学校の保護者面談だ。

長男も同席の上で臨んだ面談では、担任の先生からいくつかの指摘を受けた。授業中におしゃべりしてしまうこと、指示されてもノートに回答を書けないこと、集中が続かず先生の話を聞いていないことがあること。先生の表情は陰しく、はつきりとした厳しさが言葉に表れていて、それらの問題が放っておいてはいけない重大なものだということがはっきりと受け取れた。

我が子の課題を突き付けられた瞬間は、正直なところ、胸がざわついた。でも、先生は長男の利発さをしっかりと認めてくださりつつ、今後クラスの一人として協調していくために必要な課題を示してくださったのだ。そして、私と長男はそれを乗り越えていけると思える空気がそのときすでに芽生えていた。だからこそ、このときの私は、長男に対して「反射的に言い聞かせて正す」ことはしなかった。

家に帰ってから、私は長男とじっくり話す時間をとった。以前の私なら、先生から聞いた話をそのままぶつけていたかもしれない。けれどこの日は、まず彼自身の話を聞いてみたいと思った。怒るでもなく、詰め寄るでもなく、ただ「先生のお話を聞いて、どう思った？」と尋ねるところから始めた。何があったのか、どんな気持ちだったのか、なるべく静かに聞いてみようと思った。

最初は言葉少なだった長男も、ぽつりぽつりと、それぞれの問題に対する思いを話し始めた。たとえば、ノートに答案が書けないという指摘についてのやり取りはこんな風であった。

私「ノートを言われた通りに書けないと言われたね。どこで止まっちゃうのかな」

長男「先生の言うてることはわかるんだよ。でも、答えが出てこないんだ」  
私「じゃあ、お母さんと一緒に練習してみようか」

長男「うん、わかったよ。ほんとはやりたくないけど、わかったよ。」

なんてことない、ありふれたシンプルなやり取りにみえるかもしれない。でも実際には、彼が私に応答したときに見せた表情と空気に、私は胸を打たれた。以前の彼であれば、「嫌だ、やりたくない」という拒絶と我慢の空気を全身からにじませながら苦々しく「わかった」と答えたことであろう。それが今回は、明らかに違っていたのだ。『やりたくない』で

もやってみる”。彼の中でふたつの気持ちがきちんと並んでいた。その在り方に、私は胸を打たれた。頑固に見えた彼のなかには、しっかりと意志と柔軟性が育っていた。

先生からいただいた他の指摘事項についても、彼なりに向き合い、すでに自分なりの整理をしていたことがわかった。授業中のおしゃべりの件は、「謝るのが嫌だったから、もうやらない」と自分で決めていた。頭の中で別のことを考えてしまう癖についても、「授業のときは、考え事を少しでもやめればいいね」と、自分を自分でコントロールできる自信を言葉にして表明してくれた。小さなやりとりの中に、彼の「自分を語る力」や「自己効力感」、「芯のある強さ」がたしかに感じられた。

私たちの対話はどれも小さなやりとりだったが、言葉の端々から、彼なりに考えて、選んで、動いていることが伝わってきた。彼は、“ただ怒られる子”ではなく、“ちゃんとしていない子”でもなかった。彼の中には、確かな理由があつて、自己理解があつて、状況を冷静に見る目もあつた。そしてそれを上手に語る力を持っていた。私は、それを嬉しく思つたし、いままで彼の良さを見逃していたことを少し悔しくも思つた。そして、

「長男とも、通じることができたかも知れない」

と思つたのである。理屈で理解し合つたのではなく、言葉でねじ伏せたわけでもなく、「通じた」。言葉のキャッチボールとはこういうものだったのかと、気付かされた。

その後、日常の中で、ふとした瞬間に空気の違いを感じるようになった。食卓での表情、声をかけたときの反応、部屋から出てくる足取り。以前と同じ行動なのに、どこか軽やかさが出てきた気がした。私の声かけに対し、

「嫌じゃないよ」

「ちゃんと聞こえてるよ」

そう応えてくれているような、そんなメッセージが、言葉でなくても伝わってくる。

彼が変わつたのか、私が変わつたのか、たぶんその両方だ。確実に、景色は変わっていた。言葉の中に『まなざし』が宿るようになったとき、私たちの関係に、静かな風が吹いたのだった。

## 五 次男がくれた「寄り添う力」

こうして、次男の看病をきっかけに、子どもたちと通じ合う喜びを学んだ私だったが、思い返せば、その成熟の芽は、次男が生まれた瞬間から、少しずつ育まれていたのかもしれない。

長男は、繊細で、時に力強い子だ。友達と走り回ったり、ぶざけて笑ったりする、ごく普通の小学生男子でもあつたが、生活の合間に垣間見える細やかな思考や感受性、そして意志を貫く力強さが印象的だった。そして、それが私の過去の未解決の感情に触れ、私を強く揺らす瞬間が多かった。だからこそ、初めての育児でその長男と向き合うことが、私にとって大きな価値があると同時に、とてつもなく難しい試練に感じられたのかもしれない。

一方、次男はおおらかで太陽のような存在だった。次男が見せてくれた笑顔には、長男のそれとはまた違う、特別な力があつた。長男の笑顔は繊細で「やわらかい」印象だったが、次男の笑顔はまさに「きらきら輝く」ような笑顔だった。彼が笑いかけると、私は太陽にコートを脱がされた旅人のように、心を溶かされ一緒に笑ってしまうのだった。ただこちらを見て、目が合った瞬間に、にっこりと笑ってくれる。「見てるよ」「うれしいよ」そんな気持ちが、言葉にしなくても伝わってくるような、あたたかいまなざし。それが私の心をやわらかくほだした。日々のふれあい遊びや、離乳食づくりの中でも、次男の『まなざし』の力が私の育児をいきいきとしたものに変えた。たとえば食事作りでは、



「これくらいの形状で、これくらいの風味なら、食べてくれそうだな」というように、次男が喜びそうなやり方が、自然と思い浮かんだ。そして作ったものを実際に食べてくれる、楽しそうに体を揺らす、目を合わせてにこっと笑ってくれる。うまくいったときの反応がとてもわかりやすく、だからまた応えたくなった。「こうすればいい」が通じる、嬉しい日々だった。

次男の感情表現がわかりやすかったからなのか、それとも私の心に余裕が生まれていたからなのか。どちらが先かわからないが、私の中には確かに「目の前の子を見る」感覚が育っていた。言葉ではなく、表情やしぐさ、空気を読むような関わり。それは「寄り添う」という姿勢そのものだった。

そして今、私ははつきりと認識している。おそらく、私を変えたのは看病という「試練」ではなく、次男の『まなざし』が私を変えたのだ。看病はその変化を私自身に気付かせ深く根付かせる「きっかけ」にすぎなかった。次男のいきいきとした表情に魅せられ応える日々が、知らず知らずのうちに私を育てていたのだろう。言葉の有無は、大きな問題ではなかった。むしろ、言葉がないからこそ、私の中の「見る力」や「感じ取る力」が育っていったのだと思う。

次男は、私に「寄り添う力」を教えてくれた。それは、「何を言うか」ではなく、「どう見るか」から始まる関わりだった。

## 六 「通じないから、通じた」

次男が教えてくれた「まなざしの力」と「寄り添う力」。それが長男との関わりにも波及し、長男とも空気につながる感覚を捉えられるようになった。言葉で通じようとしてもできなかったことが、『まなざし』を手に入れたことで言葉なく通じることに成功し、しまいは「言葉で」通じ合うこともできるようになってしまった。これは、私にとって意外

であり、不思議であった一方、どこか腑に落ちる感覚もあった。言葉がうまく通じないもどかしさの中で、私は初めて表情や空気につながるという、新しいコミュニケーションの形を知った。言葉がなくてもお互いの気持ちや存在を感じ合える瞬間があり、そしてその先に言葉での理解も生まれたのだ。そしてそれは、言葉で直接伝え合うことが難しい時期を通ったからこそ得られたものだった。長く苦しいプロセスを経たからこそ、後に言葉でのやりとりが豊かになり、深まった。言葉が通じないからこそ、本当に大切なつながりが育まれた。

## 「通じないから、通じた」

この逆説的とも言える教訓を、私はいま、静かに抱きしめている。言葉でうまく伝わらなかったからこそ、言葉を超えた『まなざし』でのつながり、そしてその先にある心のつながりを知った。言葉がなくても通じ合えることの深さを、子どもたちが、長男と次男が、教えてくれたのだ。

## 七 腫れ物から宝物へ

かつて私は、長男をどこか「腫れ物」のように扱ってしまっていたように思う。私の内面を、明るい部分も暗い部分も、まるごと映し出してくる存在。ときに私の中で未解決の部分を鋭く照らし出すその姿に、私はどう接していいかわからなかったのだと思う。自分の中の「触れたくない場所」と重なりながら、彼の感情や行動がまっすぐに飛び込んでくるたび、戸惑い、身構えていた。けれど、次男が生まれ、私は少しずつ変わった。言葉ではなく表情や空気につながることで、寄り添うという関わり方を知ったことで、子どもをまるごと受け止める感覚が、自分の中に育った。今では、長男も次男も「まるごと大切にしたい存在」だと、自然に思えるようになっていく。

そして、いまでも長男は、私の内面をよく映し出してくれる存在だ。けれどそれを、もう怖いとは思わない。むしろ、自分と向き合うきっかけ

けを与え続けてくれる彼に感謝している。自分自身を大切にするとはいふことなのか、彼は私に教えてくれているのだ。そして同時に、長男は私と重なる部分が多くあっても、私とは違う「ひとりの人間」なのだ、心の底から納得できるようになった。ひよつとすると私は、子どもたちだけではなく、自分自身を腫れ物として扱ってきたのかもしれない。そして、それをようやくやめられたのかもしれない。過去の痛みを全て癒すことはできなくても、それと距離を取ることはできると知った。その距離が、私の心に静かな呼吸と、少しの余白を取り戻させてくれたように思う。

長男も次男も、そして自分自身も、いまでは大切な宝物だ。その「宝物」感覚は、キラキラしているというよりは、むしろ素朴で小さくて、お気に入りのお宝にそつとしまっておきたいような、そんな不思議な感覚だと知った。すべてを理解できなくても、完全に言葉が通じ合わなくても、私たちがつながれる瞬間が確かにある。それで十分、それが全てだ。今、私はそう実感している。

## 八 結び

子どもたちと過ごす日々のなかで、私はずつと、「通じ合いたい」と願い続けてきた。でもその願いの中には、どこかで「わかってほしい」「わからせなければ」という焦りや力みがあったように思う。うまく通じず、どうしても伝わらないのだろう、と戸惑い、もどかしさを抱えた時期が長かった。だが今、ようやく実感している。心を通わせるとは、「わかる／わからせる」ではなかった。

「通じないからこそ、通じた」

この不思議な逆説にこそ、私たちの関係の本質があったように思う。長男は、ろうそくの明かりのように、私の内面をそつと照らし出した。見たくない、知りたくないからと、気付かないふりをしていた自分の感情。

彼の存在を通して、私は自分の「影」と向き合うことになった。次男は、太陽のように私をあたため、解きほぐした。ふたりは、それぞれ違う光で、私を導いてくれた。私はようやく、自分自身と、そして子どもたちと「自然に通じる」日々の喜びを見つけた。

わからなくても、ただそばにいればよかった。

言葉より先に、『まなざし』があった。

そして、『まなざし』をもって言葉を紡いだとき、それは初めて生きた言葉、通じる言葉となった。

## 九 感謝とこれから

私は今、たつぷりと次男のまなざしを浴びている。彼の輝きや、おおらかな呼吸を、そのまま感じとる時間を与えてもらっている。そして、長男の細やかな呼吸と調和する心地よさも味わっている。彼の繊細さを少しずつ受け止めながら、ともに歩んでいく幸せを感じている。こうして子どもたちに向き合うまなざしをもてたのは、多くの支えがあったからだ。行政、産婦人科や助産院、保育園、小学校、義両親、実両親、そして夫―多くの支援があったからこそ、私はようやく「見る」ことができるようになった。

そして、ふと思いを馳せるのは、ここまでたどり着くまでの長男との七年間だ。長男もまた、彼らしいかたちで、ずつと輝いてきた。やさしい笑顔を私に向け続けてくれていた。けれど私は、その光をどれほど受けとめ、彼に返すことができていただろう。その答えを探す余裕さえなかったあの頃の自分を、ときどき口惜しく思い出す。それでも、大丈夫。これからがある。私はもう、自分と子どもたちの間で交わされる『まなざし』の存在を知っているから。

子どもたちへ。まだ伝えきれていない思いもたくさんあるけれど、何よりも先に、「あなたたちがいてくれて、ほんとうにうれしい」と伝え

たい。

家族へ。私は長く、「正しさ」という枠の中でもがいてきました。そんな私を見放さず、そばにいて支えてくれたことに感謝しています。当時の私は気付いていませんでしたが、そこにはそれぞれの『まなざし』がたしかに存在していたことを、私はようやく知りました。

そして最後に。こうして自分の歩みを振り返り、言葉にする機会を与えてくださった暁烏敏賞に、心よりお礼申し上げます。